なゝかまど

東京旭川会 会報

創刊号　昭和54(1979)年8月30日
発行　東京旭川会
東京都新宿区西新宿7-4-3 升本ビル
東京美装興業株式会社内
TEL.(03)363－2721
編集　東京旭川会会報編集委員会

昭和54年度の行事と活動

- ◆ 第3回総会および懇親会(10月9日・火)
  午後6時より／ホテルグランドパレス（東京都千代田区飯田橋1－1－1
  TEL.(03)264－1111　地下鉄東西線九段下駅下車徒歩1分)にて
- ◆ 第2回会報の発行
- ◆ 会員名簿の作成と発行(9月下旬)
- ◆ 会員の拡大PRと勧誘活動

創刊号に寄せて

旭川をふるさとにもつ人々の懇親の輪を広げよう!!

会長　平岡敏男

石川啄木の歌集「一握の砂」には、ふるさとを詠んだ作品が実に多い。

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

◇

かにかくに渋民村は恋しかり
おもいでの山
おもいでの川

◇

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

◇

ふるさとに入りて先づ心傷むかな
道広くなり
橋もあたらし

◇

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

ふるさとを思う歌を拾いだしたら際限がないくらいだ。昔から生まれ故郷という言葉もあり、第二の故郷という発想もある。東京に住んでいる私は、北海道、旭川をふるさととしてもつことに、限りのない喜悦と感傷を抱いている。私は、いまの留萠市の幌糠で生まれて、小学校、中学は旭川。旭川には十年あまりしか住んでいなかった。それでも、その後五十年間、生活の基礎を築いている東京は、今でも仮の棲家という気がしてならない。そして、第二の故郷は？と問われるならば、わずかに三年間、高校生活をすごした弘前といいたい気がするのである。

東京旭川会は、旭川やその周辺をふるさととするひとびと、さらに、旭川にゆかりのある方たちの懇親団体である。私どもが旭川という共通の話題を中心にして、親しく語りあうことは、楽しくもあり、意義のあることでもある。

六月、北海道クラブの叙勲者を祝う会に出席した渋谷北海道開発庁長官は、その数日前、旭川、留萠などを視察して帰ったばかりであったが、福島県出身の渋谷さんは、私との立ち話のなかで旭川が実に立派な都会であることに驚いた。

旭川をふるさとにもつ私どもは、何といっても、旭川が、健康な、力強い、豊かな都市として発展していくことを心から願わずにはおれない。それと同時に、旭川をふるさととする私どもの後進、後輩に対しても深い愛情を抱かざるをえない。

ドイツの哲人フリードリッヒ・ニイチェ（一八四四―一九〇〇）に「孤」という詩がある。その第一節はこうだ。

鳥たちは鳴き声も高く
翼うちふるわせて町へいそぐ
まもなく雪も降ろう
幸いなるかな、今もなお故郷を持つものは

（毎日新聞社社長）

「な ゝ かまど」の由来

旭川市民の木。バラ科の落葉喬木。春から夏にかけて鮮やかな緑、秋の紅葉、葉が落ちたあとも赤に珊瑚珠みたいな実がいつまでも残る。

緑橋通りのなかなかまどの並木。赤い実に白い雪が積った風情は美しい。

主な記事

創刊号に寄せて（ごあいさつ）
平岡敏男氏〔1〕
坂東徹氏〔5〕
わが町、わがふるさと、わが望郷
有末精三、前田義徳、太田剛各氏〔2〜3〕
《郷土ニュース》
官民合せた建設ラッシュの旭川
新市議会議員四十四氏が決定他〔4〜5〕
《ふるさと短信》
変って変らざるもの　三浦綾子さん〔6〜7〕
トウキョウの中のあさひがわ《味の店》
忍路、ビストロ・ボン・ボワザン〔6〜7〕
郷土の広場「な、かまど」のこころ
谷　武雄氏〔8〕
会の設立とその後の活動〔8〕

北門の軍都時代に想いを馳せて

有末精三

明治三十六年二月、当時陸軍工兵大尉だった父は、東京から旭川の工兵隊へ転任した。私は当時東京、千駄ヶ谷の尋常小学校の二年生で、満八歳の腕白小僧であった。粉雪の降る中を両親と兄弟五人（姉二人、弟二人）が客馬橇で旭川駅から八キロ位ある郊外字近文の陸軍官舎に、落ち着いた。私はもともと空知郡沼貝村（現美唄市）の茶志内屯田兵村に生れた生粋の道産児だったが、父が軍職にあったため、内地各地を転々としていて、この時はじめて旭川に根を下ろしてホントウの旭川ッ児になったのであった。

日清戦争後、いわゆる臥薪嘗胆の国策に則って、陸軍軍備拡張、師団倍増の最先頭に立ったのが北海道の第七師団の新設であった。しかも、その中の僅かに歩兵一ヶ聯隊だけが札幌郊外の月寒に置かれ、師団主力の歩兵三ヶ聯隊と騎、砲、工、輜重の各特科の大部隊が旭川郊外に創設された。当時、全国十三ヶ師団が分屯した衛戍地で、これほどまとまった部隊が一ヶ所に配置されたのは、旭川以外にはなかった。つまり、旭川は純然たる北門の鎖（さ）やくいわゆる軍都そのものであった。二千メートル四方の練兵場（現在その一部に自衛隊第二師団司令部がある）を隔てて、旭川町に連なり、旭川駅までの一本道路は街の背骨で、師団道路と呼ばれ、石狩川支流に架けられた旭橋と常盤橋とを越えれば、駅までは碁盤の目の街造り。当時、旭川は人口約二万で小樽、函館、札幌についでの北海道の四大都市の一つであった。

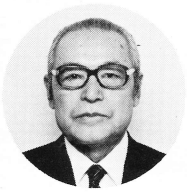
私は、明治四十年の春までの満四年間、この軍都の一角にあったバラック建ての私立北鎮尋常高等小学校（将校子弟ばかりの小学校）に通った。丁度、日露戦争の最中で、出征将校留守家族の一部が内地へ引き揚げたので、生徒総数は僅か百名足らずであった。学友十名余りで作った戦友隊での戦さゴッコにふけったりした思い出、ことに明治三十八年一月二日の夜、旅順陥落奉祝の提灯行列の群衆に混って凍りついた雪道をキッキッと踏みしめながら、各隊の衛門前で白い息を吐きつつ万歳を叫んで歩いたあの夜のことは今も忘れ得ない。四十年の春、父が退役したので、茶志内に帰郷、一年後の四十一年四月、上川中学（現旭川東高校の前身）の第六期生として入学、上中寄宿舎南寮に入寮して一年半を過した。この間における数々の思い出のうち、一番印象に残っているのは厳冬季における年中行事の雪戦会である。全校学生を紅白に二分して、約十日間で築き上げた相対する氷の堡塁の争奪戦、上級生の素肌に柔道衣を纏った選手を人梯を組んで凍り固めた前塁の攀登、塁上からは防禦軍が敲き落すという壮烈な攻防戦。そして、本塁複廓に迫って日章旗を立て合うという勇壮な雪戦スポーツは、上中が発案校であり、その誇りとともに今でも脳裏から去らない。

四十二年九月、私は仙台陸軍地方幼年学校に入学のため、懐しい旭川を去った。それから実に春秋七十年。戦後数回、訪問の機を得て、練兵場の角に復現した護国神社に参拝したり、往年馳駆した山河に接しては低回去るに偲びない感懐に耽ったりした。一方、駸々乎として殷賑を極める市の発展に眼を見張り、その近代化の波に転々桑滄の感に浸ったものである。

二年前、旭川会が設立されて、私もその会員の末席に連なることを許され、毎年一回の総会には出席して昔を偲び、日に月に発展する旭川市の近況を耳にするのを楽しみにしている次第。この度、会誌「な、かまど」の発刊によって、さらにこの楽しみの倍加せんことを期待してやまないところである。

（元陸軍中将・現日本郷友連盟名誉会長）

いまだ肌に感じる少年時代の印象



前田義徳

旭川で生れて、そこで育った私にとって、「ふるさとの今昔」は、過去を振り返っても現在をみても、そしてまた、未来を考えても、その姿は、すべて躍動と、進歩という大きな構図の中心で、異様な変化をみせるばかりだ。

子供のころの、神楽岡あたりの、一種の「探険」を思い出してみると、それは言いようもない、無気味な深山幽谷で、自然動物園がもつのにひとしい、神秘で、深淵な、つよい驚異を肌に感じさせるものがあったことを、未だに忘れられない。

そしてそこでは、夏の終りから秋の始めにかけて、「コクワ」や山ぶどうが、何処にでも、たわわになっていたのであった。そこは、野生の多くの動物と、食糧の接点でもあり、それらぎであったように憶う。私は東京オリンピックの前後から、オランダのベルンハルト殿下（王妃の夫君）の強いご要望で、「世界野生生動基金日本委員会」の日本代表に就任し、それに深いご関心を持たれ、私達の活動を背後から支えて下さる皇太子殿下と、少くとも毎年、数時間にわたってご懇談の機会を与えられているが、その都度、私は、時に、少年の頃のあの地帯での、あの強烈な印象とのかかわり合いを錯覚することがあるのであった。

私はNHKの会長を退いてから、求められて日本体操協会の会長に就任しており、今年も六月の始め、世界の一流男女選手の参加を得て、「ワールドカップ、一九七九年東京大会」を成功裡に持つことが出来たが、先年、モントリオールのオリンピックで、笠松選手の盲腸手術等の事故があったが、残り五人の男子選手が死力をつくして世界の王座を守った直後、生れ故郷、旭川市の要望に応じ、塚原君を始め、全選手と同道して、函館、札幌のエキジビジョンを経て、旭川市にうかがったことがあった。その際、旭川市には、体操競技にふさわしい体育館がなく、やむなく、ある私立学校の比較的広い体育館のご協力を得て、そこでエキジビションを行い、結果は非常に大成功だった。その際、私は時の旭川市長に対し、人口からいっても、北海道第二の大都市旭川市にふさわしい「体育館」がないのは残念で、是非、その建設をお願いしたいと申し入れておいたが、昨年末、それがようやく完

青春の証明を旭川に求めて

わが町、わがふるさと、わが

世間には学閥、財閥、派閥、閨閥、軍閥などと称する集団があるが、ここに「ふるさと閥」があってもおかしくはない。ただ、前の各閥がどうもあまり愉快な存在ではなさそうであるのに比べ、ふるさと閥だけは何故かほほえましい。何故だろう。今回は「わが郷里旭川時代を語る」三氏にご登場願った。

【写真はビルが建ち並ぶ市の中心地、平和通り（上）と旭橋（下）】

成する目途がたち、今年の十月十日、「体育の日」を期して「こけら落し」をしたいので、改めて一流体操選手の派遣を願いたいという、正式の連絡があり、日本体操協会でも、それに即応する準備を進めていた筈であった。

その後、市長さんは坂東二世に変わり、同時にこの春、多くの体操選手を養成してきた朝日生命が、東京に体育会館をつくり、塚原君を抜いて、その校長に任命されたのであった。その塚原君が、先日私の事務所に来て、坂東市長と旭川にいる朝日生命支社長が友人ということで、十月旭川の体育館開きに行くことになったが、笠松君など昔の同僚にも出演して貰うことになっており、札幌でも同じ方式でやって来たいというご報告であった。

誠に結構なことである。しかし、コマーシャリズムと、アマチュアリズムはどう区別すればよいか、建て前と本音をどう区別出来るか？、大きな構図の中での躍動と進歩は、「営利と個人的妥協の形」で様変りしつつあるのも、ひとつの新らしい現象であろうか。故郷の昔をなつかしむ所以の一つでもある。（元ＮＨＫ会長）

剛健の気風を重んじた北寮生活

太田　剛

大正年代、旭川中学へは宗谷線、富良野沿線の俊才が集ってきた。寄宿舎は校舎の東側構内にあって南寮、北寮に分れており、わたくしは郷里富良野の先輩たちが北寮にいた関係から希望して北寮に入れてもらった。

寮は六室あって、それぞれ和室の十畳間に上級生の室長を含めて四名、窓際に机を並べ、部屋の中央に炉が切ってあり、冬でも炭火で、ストーブもなかった。今から思うと、あまり上等の設備ではなかったが、われわれは一向に苦にしなかったし、寮生活は極めて規律がやかましかったが、それでも結構楽しく勉強をしたものである。

北寮の舎監は鈴木栄蔵先生で、水戸で勉学された方。学校では漢文、算数を担任された謹厳な先生で、当時五十なかば過ぎの年輩であったが、われわれの眼にはすでに老学者の風格があり、眼がねをかけた大学目薬の看板によく似たところから「大学さん」のあだ名があった。先生は朝晩健康法として大きな声で自疆術を行われ、また、漢詩づくりを得意とされ、月一回の茶話会には精神訓話やら自作の漢詩の紹介などがあった。朝食事の朝礼、夜の自習時間後の点呼にも和服に袴をつけ威儀を正して出てこられた。また、われわれの学資は毎月親許から直接舎監先生宛てに送金され、小遣いが入用のときは舎監室の前で一々使途を申し述べて頂戴したものである。このように鈴木先生は謹厳であったが、奥さんは大変さばけた方で、いつも温顔で寮生をやさしく叱ってくれた。

このような舎監先生のもとで、北寮は質実、剛健、友愛を三綱領とし、南寮の比較的自由な空気とは異った規律ある寮風をもち、われわれはそれを誇りに思ったものだ。南寮とは異って、外出時には和服の場合は袴をつけ正帽を被らねばならず、寮の風呂場は燃費の関係から使用されず、五条の八丁目の銭湯にでかけるときも同様であったし、和服でテニスをするときも袴をつけていた。また、北寮にはおもしろい掟があって、寮生同志、上級生に対しては尊称として「君」をつけ、同級生と下級生に対しては「氏」をつけて呼んだ。未だに当時の寮生仲間では、会うと昔の癖で、君や氏をつけて呼び合っている。寮では剛健の気風を重んじ、かつ健康のためスポーツを奨励し、一年生は入寮早々グランドに引張り出され、朝食前にシートノックでしごかれたものだ。テニス、卓球、冬の板かるたなども盛んで、お蔭でスポーツは何でも一通りこなせるようになり、体格も頑丈になった。したがって、寮生の中には学校の野球、庭球、陸上競技部などの選手もいた。わたくしも一時、野球部に入ったが、母親が肋膜炎になると心配したので退部した。こんな次第で、中学時代を虫のつかない「箱入り息子」で過したわけであるが、この規律ある寮生活が、その後の人生行路の健全な基礎づくりになったと感謝している。平岡会長（中学の同期生）から寄稿の依頼があったので、こんな駄文を物して責をふさぐことにした。

（北海道倶楽部理事長）

郷土ニュース

ニュース提供：旭川市東京事務所

官民合せた建設ラッシュの旭川

昭和53年8月14日、第二回総会が160名の参加のもとに盛大に開かれた。この日は旭川からも松本市長はじめ新谷商工会議所会頭らがかけつけ、パネル展示や物産品即売会も人気を呼んだ。写真はパーティ風景と平岡会長のあいさつ(円内)。ホテル・ニュージャパン大宴会場にて

空港拡張事業を推進

現空港は、旭川市の隣町、東神楽町に位置し、千二百㍍の滑走路で東亜国内航空YS11が一日三便就航しているが、これを二千㍍に拡張し、ダグラス9やボーイング727等のジェット機乗入れを計画、五十七年度完成を目途に工事中。総事業費は百五十二億円で、工事のカナメは通称ハリ山と呼ばれる山が離着陸の障害になるための堀削と盛り土。新空港建設予定地は起伏の激しい傾斜地であるため、高低差の大きいところで三十㍍。これを埋めるのと、障害除去のため、二・五㌔㍍はなれた山を削りとって運ばなければならず、総量は六〇〇万立方㍍で霞ヶ関ビルの十二杯分。全国の空港でこれだけの規模で盛り土する前例はない。それだけに難工事が予測されるが一日も早い就航が望まれている。

旭川新道本格工事へ

六十六年度の完成を目指し、本年度から本格的な工事に入る旭川新道は神居町台場の国道十二号線を起点に忠和、春光台などを通り、永山二丁目の国道三十九号線までの延長十四キロ㍍で幅員は四～六車線を計画している。総事業費は四百十八億余円で、市の中心部を通る国道十二号線のバイパスとして利用される。なお、石狩川を渡る近文大橋は今年二月から橋脚工事に入り、一部供用できるのは五十七年の見通し。

総合体育館十月オープン

市立総合体育館が総工費十三億余円、面積にして五千四百十三平方㍍で、花咲五丁目の近文運動公園に建築が進行中で、十月十日の体育の日にオープンする。その記念事業として「日中対抗卓球大会」、「全日本体操チーム模範演技」、「バレーボール日本リーグ参加チームの模範試合」、「東海大学柔道部模範試合」の四つの国際国内試合を行なう。

一・八ビル今秋にもオープン

一・八ビルは、一条八丁目の一角(旧丸井今井デパートの筋向い)で、敷地面積三千七百四十八平方㍍に五十三年二月着工、鉄骨鉄筋コンクリート地上八階、地下一階で、延べ面積が二万二千八百二十平方㍍。総事業費は四十八億円。緑屋旭川店をキー・テナントに、サブテナント三十五店が入店予定で店舗面積は新丸井今井デパートに次ぐ二番目の規模。今年九月にはオープンの予定で旭川駅前から西武、長崎屋、丸井今井、マルカツなどと並ぶ一大ビル街を形成、旭川の新しい顔がまたひとつ生れようとしている。

大型店進出名乗り相つぐ

他市の動向にもれず、旭川にも本州大型店の進出の動きが相ついでいる。一つは大成小学校跡地に出店する〝イトーヨーカ堂〟。二つめは大町地区への進出を明らかにした〝ニチイ〟。三つめは電気軌道敷地(旧追分地区)への出店を計画している〝西友〟。

まず、イトーヨーカ堂については「大成ファミリープラザ」とし、市内六条十四丁目の旧大成小跡地に五十五年オープンの予定。旭川の第二の買物公園として、昨年七月にオープンした「銀座通り」しあわせ広場(旧十五丁目銀座通り)と関連させながら新しい街づくりへと動き始めている。

ニチイは市内大町三条九丁目の貯炭場跡地に計画し、地元と①開店時期②売場面積③営業時間などについて協議中。五十五年六月オープンの方向で話しあいを進めている。

一方、西友は、旭川電気軌道追分ターミナルを中心とする敷地三万九千六百平方㍍を借り上げ「西友豊岡ショッピングセンター」として五十五年夏のオープンを予定。

旭鉄庁舎新築へ動き

市内宮下六丁目に、旭鉄管理局庁舎が新築される。地上七階、地下一階建てで総事業費が三十一億円、五十五年秋に完成の予定。

現庁舎の跡地にはバスターミナルと駅ビルの建設計画が進められており、旭鉄局では来年三月にも市、金融機関などで構成する第三セクター方式による旭川ターミナルビル会社(仮称)を設立したいとしている。

旭川―千歳間 直通バス運行で便利に

空の利用者を中心に、北都観光旭川支社が、四月一日から千歳―旭川間の直通バスを走らせている。一日二往復で所要時間は三時間半。とくに、荷物の多い人などは札幌駅での乗りつぎがないから便利である。千歳空港発午後二時二十分、同午後四時二十分と旭川駅前発午前七時三十分、同午前九時。岩見沢、滝川、深川にも停車する。片通二千二百円で、券の購入は乗車してからでOK。

情報化時代に即応強化―― 旭川東京事務所オープン

五十三年十一月、旭川市が都内に東京事務所を開設した。この事務所は情報化時代に対応するため、中央レベルでの的確な情報収集と、旭川の実情を迅速に伝えるのが主な仕事。場所は都内千代田区麹町三ノ五、得水ビル二階、電話(〇三)二六五―七八五五～六、営団地下鉄有楽町線の麹町駅下車。半蔵門出口から徒歩約三分。文芸春秋ビルの斜向い。

新市議会議員四十四氏が決定

五十四年四月二十三日の選挙の結果、市議会議員四十四人が決定。会派議席数は自民クラブ十六、市民クラブ八、清風会三、社会クラブ十二、公明党三、共産党二、で、氏名等は次のとおりである。

【市議会議員リスト】　相馬和夫、石田真男、伊藤良、藤原実、今野勝文、中島嗣郎、槇三郎、今津寛、賀集一正、渡辺雅士、鎌田勲、中村悦、神山昌子、松原秀雄、田辺八郎、泉真砂子、早坂幸二郎、沖本賢治、菅原功一、岡崎信義、早勢忠夫、三島栄太郎、伊林幸雄、沼田進、三原幸雄、大西正剛、佐藤勝則、深野弘、山本芳雄、吉野務、関根正次、竹内範輔、印田隆、佐藤勇、宮川啓記、常磐正栄、小沢仁良、保坂正蔵、赤塚勉、松浦守、間宮保、糸川一之、太田俊一、小柳勝人（敬称略）

首都東京でご活躍の旭川会の皆様が会報を創刊されるにあたり、旭川の近況をご紹介しつつ御あいさつ申しあげます。

旭川は今、初夏を迎え大雪山連峰に残雪を見ながら、これからの短い夏を謳歌しようとしているところです。近郊では、最盛期を少し過ぎてはいますが、フキ、ワラビなどの山菜が摘れるなど、今が一番楽しい季節のようです。

農作物も、ここ二、三日、十五、六度と低温が続いておりますが、比較的順調に成育しており、今後の天候次第では今年も豊作が期待できそうです。

私も昨年十一月、市長に就任して以来、市民はもとより内外の暖いご指導を得ながらあわただしい七ヵ月を過ごしてまいりました。昨年十一月末、市長就任後初めて市長という立場で上京させていただいたおり、ホテルから、ビルまたビルが立ち並ぶ都内の景観をながめながら、この大都会に旭川から間近に見える大雪の大自然を造ろうとしたら、一体どのくらいの費用がかかるであろうと考えたことがあります。私達が持っているこの雄大な郷土の自然が何ものにもかえがたい大切なものであるかを、改めて認識させられ、この大自然を有効に活用しながら、地方都市旭川を発展させることが私どもの責務であることもまた痛感いたしました。

北海道は、「中央から遠い」とくに道北地方は、札幌を中心とする道南に比べ一層「遠い」という印象が強く、それが道北地方の開発、発展を遅らせている原因の一つでもあり、しかも、北海道はなんといっても半年間は雪の生活です。暑い夏の期間をどう活用するかは、北方圏に住む私達の知恵でありますが、本州各市に比べると大きなハンディであり、これも社会資本の整備を遅らせている原因の一つであると考えます。

その遅れを取り戻すためにも、北海道をより理解していただくことが必要であると考えます。そのためには、まず中央との時間的な距離を短縮することです。旭川空港のジェット化を五十七年度完成を目途に、鋭意建設を進めており、北海道新幹線については、青森、札幌間は五十八年をめざし、さらに札幌、旭川間についても早期着工を図るべく各方面に運動を展開しているところです。これらが完成すると空路で東京、旭川間が一時間半と日帰り圏に入り、鉄路では約七時間とぐんと近くなります。

一方、大規模食糧供給基地としての重要な役割を担う北北海道において、産業経済規模の拡大を図るためには道路交通網の整備が急務であります。そのための基幹的な役割を持つ北海道縦貫自動車道建設も進められており、ここ十年くらいの間には道北地方は旭川を拠点として飛躍的に発展すると大いに期待もし、そのための努力もしていきたいと思います。

地方の時代といわれている今日、旭川市も特色のある地方都市としてのイメージを持ちつづけ、東京在住の旭川会の皆様がふるさととしていつでも心よく里帰り出来るようなすばらしい街にしたいと頑張っております。

どうか郷里旭川発展のため一層のご協力を賜わりますようお願い申しあげます。

（昭和五十四年六月記）

旭川―東京を結ぶ
ホットラインに期待する

旭川市長　坂東　徹

新年度 市の重要事項まとまる

旭川市の五十五年度の主なる重要懸案事項は次のとおりである。

一、がん検診センターの設置
二、道立福祉センターの建設
三、二十一世紀の森の造成
四、道立美術館の設置
五、第二勤労青少年ホームの建設
六、農業会館の建設
七、総合保健センター設置
八、中核工業団地の造成
九、勤労者福祉会館の建設
十、大規模自転車道の建設
十一、忠別ダムの建設
十二、旭川工業高校の移築
十三、市立旭川南高の道立移管
十四、北海道新幹線鉄道の建設
十五、国土開発幹線北海道縦貫自動車道建設

名投手スタルヒンの 顕彰像近文公園に

旧旭川中学（現旭川東高）からプロ野球の読売巨人軍に入団し、日本最初の三百勝を記録した世紀の大投手、故ビクトル・スタルヒンの顕彰像が今秋、近文公園に建立される。旭川が生んだ大投手なのに、これまで思い出となるものは何もなかったため、旧旭川中学野球部のOBらが昨年二月、顕彰像建設期成会（小林建造会長）を結成し、計画を進めてきた。像はボールを頭上にかざし、高さが二・五㍍と実際の身長より六十センチ㍍余高い。制作者は全道美術協会々員の本田明二さん。

〝名物にうまいものあり〟 旭川銘菓は何？

旭川を代表するお菓子を旭川観光協会（大西功会長）が、観光協会推奨の〝旭川銘菓〟として次の八点を決めた。

① 旭豆（浅岡旭豆総本舗共立製菓）
② 旭松風（旭川千秋庵）
③ 風雪の里（一力屋本店）
④ バター金ツバ（梅屋）
⑤ 北の旅（第一梅屋）
⑥ いも侍（壺屋総本店）
⑦ 氷点（藤屋製菓）
⑧ 石狩日記（ロバ菓子司）

ふるさと短信

変って変らざるもの

人情だけは大雪山のように

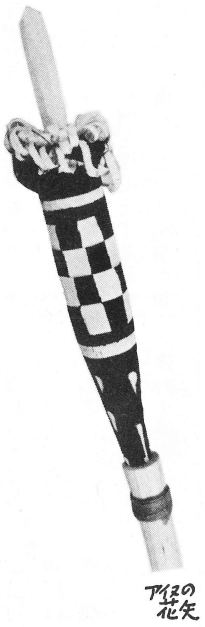
三浦綾子

三年程前、私は自分の第二の故郷である歌志内を訪ねた。何十年ぶりに見る歌志内はすっかり変っていて、私はひどくがっかりしたものだ。

今、東京におられる旭川出身の方々の胸に浮かぶ旭川は、一体どんな旭川であろう。時折帰旭なさる方は別として、旭川を出たっきり帰らない方にとっては、旭川の町はその出た時の町の姿そのものであるにちがいない。

昔、駅前には、三浦屋、宮越屋という旅館があった、師団通りには鈴蘭灯が並んでいた、四条と五条の仲通りには、美満寿館、大正館、国技館と、映画館が三軒並んでいたもの

昔も今も変らぬ常磐公園



アイヌの花矢

トウキョウの中のあさひがわ

《味の店》

忍路

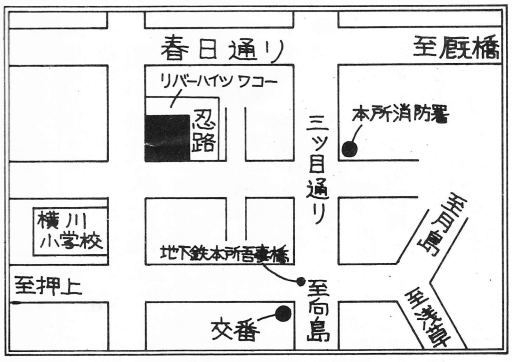
墨田区東駒形四―六―九
リバーハイツワコー一階
電話　六二三―六八三一

これら材料は、ほとんど産地からの直接仕入れでこれを東京まで空輸している。忍路の名物にニシンづけ、イカの塩カラがある。ご存知の「身欠ニシン」にダイコン、キャベツを組み合わせた漬物、氷をガリガリ噛みながらニシン漬を食べていると旭川の冬の食事が思い出される。また塩カラも北海道ならではの特色ある一隅にある忍路村からとったもので、味つけをほどこしてありいづれも手江差追分にうたわれ、かってはニシンの本場として知られている。店内の装飾もこれにちなんで、船の〝ろ〟や、とも板、網、ガラスのうきなど売り物にしているという通り値段は海のものばかり。その昔の北海道の新鮮ないい材料を使った中身に見合漁場のムードがたっぷりの店である。って良心的である。

「おしょろ」と呼ぶ、積丹半島の

現店主島田和幸さんのおばあちゃん佳代子さんが、ここで北海道料理の店を開いたのはもう十四年も前になる。本場の北海道料理を都会の人に是非味ってもらいたいとの考えによるが、もともと島田さんは道産子、小さい頃から郷土料理に親しみ手づくりの料理にかけては相当なウデ前であったようだ。

料理はすべて道産の材料を使いなべ物、焼き物、煮物と豊富なかでもお客に人気のあるのは石狩なべ、忍路なべ、生ウニ、毛ガニ、ルイベなど、イカの刺身もうまい。



文化都市として評価も高く

だ、忠別川や美瑛川には鮭が銀鱗をひらめかせてのぼってきたものだ…などと懐しく思っておられる方には、今の旭川はもうよその町になっているかも知れない。駅前には西武デパートの高層ビルが空を圧し、つづいて緑屋、そして丸井デパートと、同じく高層のビルが並ぶ。これが八丁目側である。

「おや、丸井は七丁目にあった筈だ」

と、思われる方が多いだろうが、元丸井デパートのあった跡は、丸井広場と称して小さな公園となり、舞台が置かれ、市民の憩いの場となっている。

七丁目側は、これまた駅前から挙げると、金市館、長崎屋、マルカツ、奥野等々のデパートがずらりと並んでいるのである。師団通りとうの昔に消えて、五十嵐広三さんが市長の時代に、これは買物通り公園に変身した。彫刻や噴水や木立ちのあるこの買物通り公園は、余りにも有名で日本中から見学に来る。

今年九月四日、私たち第三十三回大成小学校卒業生の同期会が持たれる。東京から駈けつけて来られる方もある筈だが、昔の懐しい校舎は影も形もない。都市のドーナツ現象によって、市内でも大きな小学校であった大成校は、同じく大きな小学校中央校と併合されて、七条十三丁目刑務所跡に、知新小学校と名も改まって、全く別の学校になってしまった。大成校跡にはイトーヨーカ堂が建つ予定であり、中央校跡には既に立派な文化会館が建てられている。

むろん、町の所々には古い建物が僅かにでも残っており、常盤公園や神楽岡公園はかなり昔の面影をとどめてはいる。ふるさとというものは、変らない所に懐しさがある。が、都市が時代と共に変化するのは必然的なことだ。さびれていく町々がある中に、旭川は繁栄の一途を辿って来、わけても文化都市として、かなりの水準を保ち、且つ中央からも評価されている。

「故郷の廃歌」という歌の中に、

朝夕かたみに　手をとりて
遊びし友びと　今いずこ

とあるが、旭川の人情だけは、変らないと私は思う。ふるさとの山・大雪山の姿が変らないように、まだ旭川の心は荒れてはいない。一番大事なものが変っていない旭川に、東京在住の方にも、時折は訪ね来られて友情をあたためていただきたいものである。

（作家）

元第七師団偕行社も、今は博物館として変身している

全国から見物者が集まる買物公園

ビストロ ボンボワザン

千代田区九段北一―三―六
電話　二六四―六四五六

銀座ミキモトビル地下にあるフランス料理高級専門店〝レカン〟の姉妹店。良き隣人という意味にふさわしく白壁に木をあしらった西欧の民家風で店内はベージュと茶のインテリアで統一された明るくこじんまりした店で家族連れや若い女性が気軽に利用出来る。

場所が違うだけでレカンの味が安く食べられるので一度訪ずれるとファンになってしまう。

メニューは魚介、肉、野菜からデザートにいたるまであれもこれもと迷ってしまうくらいバラエティーに富んでいる。

当店自慢は海の幸。サラダはさわやかなドレッシングであえた野菜をマグロ、白身魚、甘エビなどの魚介でおおってある。中央には生ウニとイクラが……。

魚介は季節によって違うがとにかく新鮮でボリウムのある一品。その他のメニューでは、魚のテリーヌ、生鮭とキャビアイチゴソース、仔牛肉のキドニー、等々。

当店特製のパンの味も格別。サラダ、スープも一味違う。あっさり仕上げられたソースは、皿に残さずパンでぬぐって食べたくなる。銀座レカンで修業したシェフの腕の確かさがソースに出ている。

どれを食べようかとメニューを手にして思案するときは、昼はランチメニュー一〇〇〇円から、夜はディナーメニュー五〇〇〇円で満足する料理が出てくる。ワインも手頃なものが用意されている。

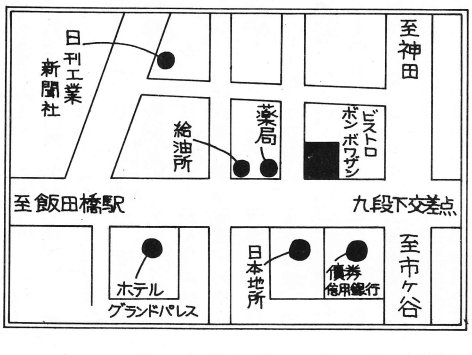
営業時間十一時三〇分～十四時　十七時三〇分～二十一時（日曜、祭日定休）。地下鉄東西線九段下駅より徒歩三分、日本債券信用銀行前。

なお、経営者矢野正康氏は旭商九回卒業、旭商同窓会東京支部副支部長。

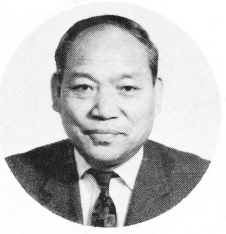
営業時間午后五時～十一時（日曜も営

都営地下鉄本所吾妻橋駅から三ツ目通りを南へ、本所消防署の向かいの通りを入った二本めの右かど。（地下鉄駅より三～四分）

なお、店主和幸氏の父君鉄郎氏は旭商十三回卒、元明大スキー部監督、元全日本スキー連盟理事、グルノーブルオリンピックアルペン監督。



郷土の広場「な、かまど」のこころ



副会長　谷　武雄

長い間、私たち旭川出身者が設立を心待ちにしていた郷土の「旭川会」がようやく誕生の産声をあげ、ここに機関誌「な、かまど」を世に送り出すことができた。平岡会長はじめ多くの皆々様方のご熱意と郷土愛のたまものであり、まことに喜びにたえない。

とくに、平岡会長は、毎日新聞社長として、ご多忙にもかかわらず、「旭川会」のこととあれば、時間を割いてお会い下され。会の運営のため、何くれとなくご配慮をいただき、副会長の私として心強い限りである。

一つの会なり、グループが、内容を充実させ、発展することは、実のところ容易ではない。私自身、いくつかの会に籍をおいているが、その集団運営が期待通りにいくかどうかは、一つにかかって中核となる世話人が奉仕の精神で、会そのものの索引車の役目を果すかどうかにかかっている。と同時に、会員一人びとりが世話人の心を心として協力しなければ、会の発展はおろか、会を継続していくことさえ難しくなる。今時、旧陸軍のことなど引合いに出すことはいかがと思うが、私もかつて軍籍にあって、郷土部隊の一員として中国大陸で幾歳月を送った。不思議なことに愛郷心で結ばれた郷土部隊になればなるほど鉄の団結をみせた、ということは今も忘れられない。郷土の「旭川会」は、そんなぶっそうな戦いの集団ではないので、二者を同一線上でとらえることはできないけれど、やはり一つの集団なり会が発展するには、一にも二にも心だ、と私は思う。いくら豊かな運営資金を積んでみたところで、あるいは徒らに人を集めてみたところで、ただそれだけなら、この種の会は発展しないからだ。リーダーの皆さんは、旭川出身者がこの会を通して何を求めているか、どうすれば奉仕者としての勤めが全うできるか。私もまた、ない知恵をしぼりながら、年々歳々、創立時の新しい心に立ち返って、皆々様へのご奉仕を続けさせていただきたいと考えている。

その意味でも、この「な、かまど」は、旭川会の道標であり、私たち会員の「広場」である。郷土・旭川の発展と皆々様方のご健勝を祈るとともに、「な、かまど」を愛読され、一層のご支援をたまわるよう願ってやまない。

（千代田企業㈱社長）

会の設立とその後の活動状況

「東京旭川会」が発足しては二年前の五十二年十月である。東京には、いわゆる「ふるさと会」に類する会や団体がゴマンとあり、中には大組織で、歴史も古い集まりも多い。それまで「ふるさと会」をもたなかったわれわれ在京の旭川ッ児が、自分たちの〝集い〟をつくろうと立ち上り、準備を始めたのは、ようやく五十年ごろのことであるから、かなり〝遅れてやってきたふるさと会〟であるといえよう。

俗に生みの苦しみというけれど、われわれの会が産声をあげるまでには多くの有志をはじめ、関係者各位の東奔西走の努力なしには考えられない。そうした意味でも、以下に「旭川会」創立までの動き、活動状況を記述し、今後の会の発展への礎づえにしたい。

〔設立準備委員会開催まで〕　昭和五十年ごろ旭川出身者の集まりをやろうとの声が出る。五十一年十月太田剛氏（北海道クラブ理事長）に会設立の意見を伺う。五十二年二月松原利治氏（現常任幹事）、三井勲、吉田三郎両氏（現幹事）らから会設立の発議。同四月在京の旭中（東高）、旭商ＯＢほか一般有志二十数名により会設立発起人会開催。同五月十日東京旭川会設立準備委員会開催（朝日生命東海ビルにて）。出席者二十八名、会則等について打合せ。

〔創立総会開催、会長ほか役員人事の決定まで〕　昭和五十二年五―八月会則、役員人事等につき打合せ。同八月平岡敏男氏（毎日新聞社長）を会長に推薦。同九月二十日設立準備委員会開催。出席者三十五名、創立総会の日取りが「十月十七日」と決定。臨時事務所を毎日新聞社秘書室に据え、同社秘書矢島氏にお世話になる。同十月十七日創立総会開催（午後六時より、ホテル・ニュージャパン大宴会場にて）。出席者一五五名、旭川市長・松本勇氏、旭川商工会議所副会頭・大西功氏もかけつける。役員決定▽会長＝平岡敏男▽副会長＝谷武雄、西原敏威▽幹事＝安藤正人、伊藤一男、大西幸男、奥野寛一、大矢健、折登健憲、加藤辰雄、河端敏博、越文子、田村昌士、戸坂治三郎、士門勇、中山精二、堀川和延、松原利治、南栄二、三井勲、三浦清史、御手洗正夫、峰尾千代、八木祐四郎、中山精二、吉田敏明、吉田三郎（以上三十四名）▽監事＝竹原茂雄

〔事務局設置、名簿完成、第二回総会まで〕　昭和五十二年十一月四日第一回幹事会。▽常任幹事選出＝安藤正人、大矢健、越文子、田村昌士、松原利治、御手洗正夫、南栄二、八木祐四郎の八名。同十二月一日事務局移転新宿区西新宿七―四―三升本ビル内「東京美装興業株式会社内」。同十二月十六日第一回常任幹事会。五十三年一月十七日第二回常任幹事会。同二月十七日第三回常任幹事会。同三月十七日第二回幹事会。同六月二十三日53年度第一回常任幹事会。同七月十一日第二回常任幹事会及び第一回幹事会。同八月十日会員名簿完成。同月十一日第二回幹事会。同九月五日第三回常任幹事会。同月八日第三回幹事会。同月十四日第二回総会開催（午後六時よりホテル・ニュージャパン大宴会場にて）。出席者一六〇名。旭川から松本市長、小柳市議会議長、新谷商工会議所会頭、大西観光協会会長はじめ、ミス・準ミス旭川のお嬢さん方が出席。市の好意によるパネル展示や実行委企画の物産品即売など好評を博して盛大。総会決定事項①会則改正承認②役員増員▽副会長＝宍戸馨▽幹事＝落合隆明、大城栄子、金安勝雄、桑本平八、佐藤正彦、玉田郁生、関口和子の七名▽監事＝黒崎弘

〔役員増員と各部会設置以降〕　昭和五十三年九月二十八日第四回幹事会役員増員▽常任幹事＝落合、大城、佐藤、関口、堀川の五名▽事務局長＝桑本平八。同十一月十七日第四回常任幹事会。各部会の設置▽総務部会＝御手洗、安藤、大矢、堀川、松原、八木の各常任幹事▽企画部会＝南、大城、落合、佐藤、関口、田村の各常任幹事選出。同十一月二十八日旭川市東京事務所開所式に平岡会長ほか六名出席。五十四年三月二十二日第五回常任幹事会。同四月十二日54年度第一回幹事会。同月二十日「北海道ふるさと会連絡協議会総会に御手洗、松原両常任幹事出席。同月二十四日、同五月十日企画部会。同月十七日総務部会。同月三十日第一回常任幹事会。同八月三十日会報「な、かまど」発行。

（事務局）

編集後記

☆ふるさとを旭川に持つ人々の機関誌〝な、かまど〟が誕生しました。編集関係者はいずれも多忙な職業を持ち一同に会する時間がとれず、しかも素人の集まりですが、どうにか創刊にこぎつけられたのもたくさんの方々から貴重な原稿をお寄せいただいたお蔭です。厚くお礼申上げます。

☆年二回発刊を目標にしておりますので、お互いにふるさとを偲ぶ場として、今後とも原稿の提供などでのご協力をお願いします。

☆十月の総会には元気なお顔でお会いしましょう。▽編集委員＝南栄二　田村昌士　伊藤一男　落合隆明　佐藤正彦　関口和子　大城栄子